

第一戒 ほかの神々があつてはならない。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、エホバである。あなたには、わたしの顔の前に、ほかの神々があつてはならない。」出エ 20:2,3

十戒は、全山が煙るシナイ山に、主エホバご自身が天使とともに（真キリ283）山の上、火の中に降りてこられ、布告された（出エ19:18）、聖書、みことばの中で、最も中核となるもので（真キリ283）、それは新約聖書、天界の教えを通じて、変わることはありません。十戒は二つの石板に、神自らの指で書かれ（出エ31:18）、後に「あかしの箱」に納められ、幕屋の至聖所にあつて（出エ26:33）、イスラエル民族の中心に置かれます。

十戒は、神の人へのつながり、人の神へのつながりを与え、宗教のあらゆる要素を詰め込んだものであり、十戒はあらゆるものの中で最も神聖なものです（真キリ283）。

二つの石板のうち、一枚目は神と人との関係の三つの戒めが記され、二枚目には人が神につながるための戒めが記されています。そこには、父母を敬え、殺すなかれ、姦淫するなかれ、盗むなかれ、偽りの証言をするなかれ、隣人のものを欲しがるなど、市民道徳的な戒めが記され、世界の近代刑法にも一部が取り入れられ、一見、わざわざ神が地上に降りてこられ、かくも仰々しく宣言されるものではないのでは、と考える人もいらっしゃるでしょう。この戒めが、人だけではなく、天使たちにとっても、最も神聖で、それほどの価値があることを認めるためには、みことばと、その内意に尋ねなければなりません。

「わたしは、エホバ、あなたの神である。」

「主が最初に述べられたことは、その後続く事柄を、支配し、内に含み、そしてこれは次々とつながってゆきます」（天界の秘義8864-3）。新約聖書や旧約聖書の様々な章を読み解く時に、この一般原則を頭に入れておけば、非常に役に立ちます。この出エジプト記の二十章も、十戒という内的な真理から、諸法という外的な真理に進み、あるいは主の祈りのそれぞれの句が、「天にいます私達の父よ」から始まり、次々と拡大されてゆくように、それはあたかも「先端から底に至るまで次第に大きくなってゆく柱のように」最内部のものが最初に来て、そこに後から次々と続く物が加えられて、大きくなってゆきます（〃 8864）。そのため、十戒と主の祈りの各句は、一対一対応がつくほど、似通ったものとなっています。これはいつか別の機会に説明したいと思います。

最初にくるもの「わたしは、エホバ、あなたの神である。」が、次に続いてゆくものを普遍的に支配します。そして神なるエホバとは、エホバとは神的善から呼ばれ、神は神的真理を意味しますが、主にある神的なものそれ自体は、天界においてさえ、決して見ることも、認識することもできません。そのためそれが具現化した神の人間だけが、私たち人間や天使の認識できる対象です（天界の秘義8864参照）。主が地上に降臨されて実際に人間となられる以前にも、神は人間として認識されていましたが、実際にマリアからお生まれになって、あらゆる試練によってご自身を栄化されたことによって、私たち地上の人間には、主イエス・キリストがすべての礼拝の対象となります。エホバ・神とイエス・キリストには、

それぞれ神的善と神的真理の結合・結婚があり、自然界への誕生以前と、誕生後され栄化されたものの区別はありますが、双方とも同じ神的人間です。主の生誕以降に存在する私たちは、より明確に見える神となられたイエス・キリストを天地の神としなければ、贖い主としての主を失念することになり、その力に預かれず、贖わないこととなります。「わたしは、エホバ、あなたの神である。」とは神的人間が善と真のあらゆる事柄を普遍的に支配されていることが言われており、私たちにとっては、神的人間である主イエス・キリストが支配されていることを認めること、これが最初に来て、最後に至るまで続きます。

この後に続く戒め、私たちは、何に爲にこの戒めを守るのでしょうか？

父母を敬え、殺すな、姦淫するな、盗むな、偽りをするな、むさぼるな、これを何のために守るのでしょうか？これを守りさえすれば天界に行けるのでしょうか？ただ社会的な評価を得るためでしょうか？世間様に後ろ指を指されないため？ただ自分に正直に、誰にも恥じるようにしないため？あるいは食事やアルコールをむさぼらないことで健康やダイエットにいいためでしょうか？

それでは、社会的な評価が高く、誰にも後ろ指を指されず、誰にも頭を下げず、堂々として、かつ健康に気をつけている人は、すべて天界に行けるかといえば、必ずしもそうではありません。彼の心の奥底にある最も大切な動機が問われます。天界は主との結合であり、主の内にいることであるからです。

「人は誰でも、すべてに勝って愛する何かを持っていて」（天界の秘義8853）、それは「川の隠れた流れのように」（# 8855）、他の何かを考え、行っても、人を引きずり、流してゆきます。生き様が見た目には立派でも、その愛するものが、ただ世間に後ろ指を指されないこと、世間への愛なら、残念ながらその人の愛するものは、主でも、隣人でもなく、「主の内に」いないので、天界の天使達には受け入れられません。自分や世間を愛するなら、自分と世間を愛する者たちと同じようなところ、すなわち地獄で住むこととなります。

主や隣人を愛するといっても、自分が知らないものは、愛することができません。愛するもの、その対象を知りたいと願います。それが愛の性格であり、本当に愛する人や物なら、何百もの対象に紛れ込んでいても、それを見つけ出してしまうことは、多くの人が経験していると思います。陳列された多くの品物から、自分の好みに合う物を一瞬で見いだし、子供や恋人であれ、大切な人、愛する人は人混みの中にも、あっという間に見つけ出します。

私は神と隣人を愛します、と口にしても、漠然としてそれ以上進まないのなら、それは口先だけ、その場限りだけのこととなります。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ6:33）（天界の秘義9184:2参照）とありますが、まさに神を「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、」（マタイ22:37）求め、愛さなければなりません。主が誰であり、どんな方であるかを知り、ひいては、誰が隣人かを知り、愛することが、十戒の大前提となります。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した」これは主が人を地獄から解放したこと、霊的な囚われから人を解放されたことを意味します（天界の秘義8866）。

主を知るには、主がどのような働きをされているのか知らなければなりません。自分は「地獄になんか居たことがないし、そのため解放されたこともない」と思うことでしょう。しかし人は誰しも、遺伝悪から地獄に生まれついており、主の支えがなければ、常に地獄に突入しようとしています。たとえば、様々なストレスに耐えられなくなって、普段はまじめに過ごしているがここぞとばかりたがを外したり、自分に害をなす相手に対して、自分だけが正しく、相手は悪いと考えて、憎んだりすることがあります。しかし一晩寝たり、少しの気分転換をするうちに、気分がさわやかになって、ストレスが軽くなったりすることもあり、すばらしい芸術や自然に触れて、相手の憎しみを忘れることもあります。これは本人が知らないうちに、天使を通じて、主がお働きになっているからです。人は地獄に突入しようとしませんが、主がそれを支えて、悪と善の間に均衡を働かせ、どちらの力も大きく働かないようにさせ、靈的自由を守っておられます。そしてできることなら、本人の意志に明らかに反しない限り、自由のうちに天界へ導こうとされています。ただ私たちが知らないだけなのです。そして、主の現実にお働きになっている絶え間ない慈しみを知らなければ、本当に主を礼拝する気にはなれないはずです。人を常に地獄から救い出し、靈的自由を与えておられるのが、主です。

その靈的自由、力の均衡の中で主は仰せられます。

「あなたには、わたしの顔の前に、ほかの神々があってはならない。」

これによって、「諸真理は、主以外の源泉から決して考えてはならない」（天界の秘義8867）ことが意味されています。「顔」は神について述べられるなら、愛と慈しみと、平安と善となり、それは主ご自身とあります、なぜなら主はそこから行動されるからです（天界の秘義8867）。主の愛と慈しみが形となったもの、これと不純な源泉から得られた形とは相容れません。真理といいますが、主の愛から生まれた本物の真理もありますが、人間が真理だと言い張っている「真理」もあり、これは偽りに近い場合が多々あります。それをどうやって見極めるか、最終的には認識に近いものが必要ですが、ヒントが与えられています。「もし内に善への情愛があれば、心の内は柔軟ですが、悪の情愛があるなら、心の内は頑なです」（天界の秘義8868）。柔軟といっても、真理を、勝手気ままに解釈することではありませんが、あまりに頑なに感じるものがあれば、悪の情愛から発している可能性があり、柔らかさを感じる時善から発している可能性があると思っていけないのでしょうか。

さらに、この部分には、「何のものにも増して自分と世間を愛してはならないことが含まれています、なぜなら何のものにも増して愛するものが、その人の神であるからです」（黙示録解説950-3）

知らぬ間に自分を支配しているものがあります。それは瞬間・瞬間にふと現れることがあります。

怒りに支配されることもあり、世間体や周りの空気に支配されることもあります。そして酒や薬に支配されることもあります。あるいは心からの同情心に動かされたりすることも、主の降り注ぐ慈しみを感じて相手に慈しみを感ずることもあります。

悪い情愛や思考に支配された瞬間に、「これではだめだ、主の戒めに反している」と自分が気づき、もどることができるならいいのですが、その支配が続き、なんらかの情愛から感情が深まり、そこから思考が生まれ、行動に至る場合があります。そこまで行けば、完全に何かに支配されているか、あるいは影響を受けています。意識して、自分を本当に支配するもの、自分を支配する「神」を見いだし、それが自分を「エジプトの国、奴隷の家から連れ出して」くれる神であるのか、主の愛から来ていない「ほ

かの神」であるのかを見極めねばなりません。

「あなたは、自分のために、彫像を造ってはならない。それがどんな形であっても、上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、造ってはならない。」

彫像は人の知性が作り出し、鑄た像は、人の意志が作り出した偶像です。自分の知性が産み出したものを人は自分のものだと思い、固執し、こだわります。これは主の愛からきておらず、自分の愛から来ている、「私の顔の前であってはならない」、「ほかの神」です。

神的なものに似た「どんな形でも」、主の愛から来ていないのなら、それは避けねばなりません。それが霊的な光の中で、まるで主への愛や隣人への愛に見えても、それが本物でない見せかけだけの「上の天」にあるものや、自然的な光の中で、一見道徳的に見えるだけの「下の地」にあるものであっても、「地の下の水の中にある」感覚的で物質的なものであっても（天界の秘義8869-72）、それは「ほかの神」です。

何事かを「幸運だった」とか、「偶然だった」と考えることは、実は主の神的摂理を信じない「上の天にある」「ほかの神」を礼拝することです。すべては自然が行うと、神ではなく、自然を讃え、神より上に置くことも、「ほかの神」です（天界の秘義8869）。自分で考えついた神のイメージに固執することもそうです。ましてや見せかけの道徳、世間体を気にした生活、娯楽や酒や薬におぼれるときは、「下の地」にあり「地の下の水の中にある」、「ほかの神」を礼拝しています。

「それらを拜んではなりません。それらに仕えてはな」りません。そうするなら、本物の神は、憎み、厭（いと）う対象となり、それらの人達から見れば、神が「ねたむ」ように見え、果ては本物の神様を憎むようになり、その憎しみは深まり「父の咎を子に報い、三代、四代にまで及」ぶこととなります。これは遺伝悪の働きも述べていますが、悪と偽りが深まってゆくことです。

この戒めを学び、実行しようとするとき、いかに神の概念を正しく抱くことが大切かおわかりになると思います。「神以外のだれか、神から発したものの以外のなにかを、すべてに越えて、愛してはならず」、それは「主イエス・キリスト」であり、「主エホバは、・・全能・全知・遍在である」こと（真キリ293-295）をしっかりと心に保ちます。

そこで「人が他の神を礼拝せず、そして何者にもまして自分や世間を愛さないようにするに依じて、主から神の認識が流れ込」（黙示録解説949-3）むこととなります。

主の命令を守る者は、主を愛することになり、そうなれば、主の「恵みは千代にまで施」され、善と真理はとこしえに増えてゆくこととなります。アーメン

出エジプト記20:1-6

それから神はこれらすべてのことばを、告げて仰せられた。

「わたしは、エホバ、あなたの神である。

わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した。

あなたには、わたしの顔の前に、ほかの神々があってはならない。

あなたは、自分のために、彫像を造ってはならない。それがどんな形であっても、上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、造ってはならない。

それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、

わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。

マタイ 22:34-40

しかし、パリサイ人たちは、イエスがサドカイ人たちを黙らせたと聞いて、いっしょに集まった。

そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。

「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」

そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

これがたいせつな第一の戒めです。

『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

真のキリスト教（アルカナ訳）

292 「わたしの顔のまえには、他の神があってはならない」という戒めにある自然的意味で、どんな人間でも、死者・生者をとわず、神としてあがめてはならないことを知ります。これはアジアおよびその周辺の諸地域で、行われたことでした。パール、アシュタロテ、ケモス、ミクロム、ベエルゼブブなどは、他ならぬ異邦人の神々であった点、アテネやローマにおけるサトゥルヌス、ジュピター、ネプチューン、プルート、アポロ、パラスなどとおなじです。以上のうち、ある者は最初聖者として敬われましたが、そののち神霊 numina となり、最後には神々となりました。かれらが生きている人間を神々として崇めたことは、メディアとダリヨスの記録からもあきらかです、

「だれも三十日の間、神にではなく、王にたいしてだけ願いごとをするように。そしてそれに違反した場合は、ライオンの穴に投げいられるであろう」(ダニエル 6:8~終節)。

293 自然的意味、つまり文字上の意味からすると、以上の戒めは、神以外のだれか、神から発したものの以外のかを、すべてに越えて、愛してはならないということです。それはまた、主のみ言葉にもあります(マタイ 22:35~37、ルカ 10:25~28)。なぜなら、すべてに越えて、愛している人間やものがあれば、それは愛している人にとっては、神であり、神聖なものである、ということになります。自分をすべてに越えて愛したり、この世をすべてに越えて愛している人は、自分やこの世が神です。だからこのような人は、心のなかで本当の神をみとめていません。かれらは地獄で、同類に合流しますが、そこには、自分とこの世をすべて

に越えて愛してきた人が、みんな集まっています。

294 この戒めがもっている霊的意味は、主イエス・キリスト以外の他の神を拜んではならないということです。それは、主こそこの世に来られ、〈あがない〉を果たされたエホバにましますからです。そのあがないがなかったら、人間も天使も、だれも救われなかったでしょう。主以外には、いかなる神も存在しないことは、〈みことば〉の次の箇所からも、はっきりします。……

295 この戒めの天的意味は、主エホバは、無限・無辺・永遠であることです。全能・全知・遍在であることです。最初にして最後、始めであって終わりであり、かつてあり、いまあり、これからもあり続ける方、〈愛そのもの・英知そのもの〉、すなわち〈善そのもの・真理そのもの〉であること、したがって〈いのち〉そのものである、ということです。ですから万物の根源であるただ一人のお方です。